



これが遊びの原点です。

八代郡宮原町

井芹 勉 さん(90歳)

眞彦さん(43歳)

英彦くん(7歳)

痛快なトーチ話で知られる彦一どん。八代郡の宮原町に、この彦一どんと狸の民話をモチーフにしたおもちゃがある。彦一ごまである。見た目には、ヒョキンな表情がかわいいただの玩具だが、これには、ちょっとした仕掛けがある。頭、胴、傘、台、尾と、すべての部分がごまになる。バカそうとした狸が逆に一杯くわされる話のとおり、まさに、狸のキリキリ舞いというわけだ。

この何ともユニークな彦一ごまを考案されたのは、宮原町に住む井芹勉さん。道楽にロクロを使っているいろいろなものを作っていた勉さんは、30年以上前、ひよんなことから、この狸を作った。本人はお遊びのつもりだったのだが、これが県の郷土展(昭和27年)で、なんと最高の知事賞をとってしまった。それから、この彦一ごま、熊本の郷土玩具として、広く人々に愛されるようになった。

90歳になられる勉さんも、まだまだ驚くほど確かな手つきで絵筆をとられるが、いま、実際に生産をしておられるのは、二代目の眞彦さん。八年前、脱サラをして東京から帰ってこられた。

言うまでもないが、彦一ごまは、ひとつひとつが手作り。5つの部品は、それぞれ10回も塗り上げられるという、たいへん手間の掛るものだ。しかし、労力の割に、値段は安い。ひとりでも多くの人の手に、という思いから、あえて採算が合わなくても値上げはしない。「お客さんが手にして、初めて、その価値や楽しさがわかってもらえれば、それでいい」のだそう。

彦一ごまの仲間には、すでに製品になっている亀それに、もうじき世に出る鶴がある。どこから見ても

も立派な置き物だが、実は、これらも分解すると、すべてごまになる。これは、眞彦さんの考案によるもの。「考えている時は苦しいけど、半分見えて来てからが楽しいですね。狸がバカすまようらうか。それはわかりませんが、考えてます」



からね、相当イジワルですよ。」と、その目ほまさに、イタズラっ子だ。楽しみながら暮らすのがモットーという眞彦さんにとつて、彦一ごまは、遊びの、人生の原点なのだという。

その眞彦さんの後に続くのが、英彦くん。遊びは、自分の発想で広げるもの。という井芹家の方針で、おもちゃはほとんど買ってもらえない。が、そこは血筋。ちゃんと自分で工夫する。今、木の船に凝っているのだそうだ。「大きくなったら、ボクもごまを作る」と頼もしい言葉も聞かせてくれた。

ヒョウタンからごまではないが、勉さんの遊びごころから出たごま。そして眞彦さんのイタズラ精神から出たごま。粋な親子によって作られるごまは、私たちに、改めて、遊びの豊かさを教えてくれる。



彦一トーチ小話の一つ
「ある朝彦一が、自分の畑に来てみると、石コロがいっぱい投げ込んである。これを見た彦一は「これは有難い。馬糞ならクソ焼けと行って、畑が焼けて困ったが」と行ってわざと大喜びをした。すると、翌朝畑の石コロは、ぜんぶ馬糞に変わっていた。彦一は「トーチで有名な彦一どんが狸に一杯くわせたお話し」



眞彦さんの奥さん英淑さん



勉さん



眞彦さん



英彦くん